

西南学院と国際交流

G.W.パークレー



西南学院は、その源流に国際性を包含している。95年前、C.K.ドージャーは、他の宣教師や周囲の日本人とともに、学院創立に大きな役割を果たした。創立時から既に、設置校は日本社会における指導者となる若者を教育することを目指すとして明確に謳われており、そこには国際社会での日本の立場を考える若者の育成が重要とする先見性が見てとれる。

時は流れて1971年、西南学院大学は、海外の大学との国際交流プログラムを確立した日本における初期の大学の一枚となった。その10年後の1981年には、生徒たちの見聞を広げるため、西南学院高等学校が訪米研修旅行を開始した。以降、大学、高等学校における国際交流プログラムが、参加した学生、生徒個人に計り知れない影響を及ぼしたことは疑う余地もなく、時にその影響は卒業後の進路や生き方にまで及んでいる。

特定分野における十分な知識・能力を備えることは、リベラルアーツ教育の目指すところであるが、その教育の過程において重要なことは、高等学校や大学時代に新しい経験を積み自己の視野を広げる研鑽の機会を与えることである。この重要性は、西南学院の国際交流の草創期から変わらないが、ここ10～20年の間の急激な世界情勢の変貌の中にあっては、この観点は従来になく批判的にも捉えられている。今日、多くの企業では、ビジネス、法曹、金融などに精通しているだけではもはや十分とは言いがたく、学生たちには、異文化への理解や文化の枠を越えた意思疎通によってグローバル社会に貢献できるよう備えることが求められている。

西南学院大学が国際交流を実施してきた40年の間には、アメリカの大学との交流からヨーロッパやアジアの大学との交流へと主流の転換が起こった。交流歴の長い大学との絆を保持しつつも、現在では、交流校の半数がアメリカ以外の大学となっている。

このことが示すように、いわゆる「アジアの世紀」と形容される時代にすでに入ってきており、今後、アジア諸国の言語習得や連携はますます重要性を増すことであろう。

海外との交流と併行して、西南学院は海外からの学生や生徒を受け入れて日本語や日本文化を学ぶ場所や機会を提供してきた。高等学校では、留学生も日本人生徒と一緒にクラスで学んでおり、大学では、海外からの留学生数は増加の一途を辿っている。いずれの場合も、留学生と在校生、在学生の相互交流は双方にとって有益である。

西南学院の創立100周年が近づくにつれて、学生、生徒、児童、園児たちが国際体験をする機会を拡大させていくことの必要性はこれからも高まる一方であろう。西南学院で学ぶ学生、生徒、児童、園児に国際体験の機会を提供するという目標を達成するために、少なくとも大学では学生総数の10%が、長期留学もしくは短期留学を体験できるようにすることが私の夢である。同時に、大学のキャンパスを今以上に国際性豊かにするためには、そこで学ぶ留学生数を最大限に増やすことに着手せねばならない。

創立100周年とその後100年の歩みに思いを馳せる時期を迎えた今、西南学院に連なる私たちは力を合わせて、これからの担う若者たちにグローバル社会で通用するコミュニケーション力と、共に生きる世界に存在する多様な文化を寛容できる力を備えさせるための教育に励みたい。